

学位論文要旨

中上級日本語学習者の Academic Speaking の特徴

— 論証に着目して —

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻 日本語教育学分野

D163312 三好 千聖

目次

第 1 章 序論

- 1.1 本研究の背景と目的
- 1.2 本研究の構成

第 2 章 先行研究

- 2 先行研究
 - 2.1 Academic Language と口頭論証
 - 2.2 Academic Speaking の特徴
 - 2.2.1 英語を対象とした研究
 - 2.2.1.1 語彙や定型句に関する研究
 - 2.2.1.2 談話に関する研究
 - 2.2.2 日本語を対象とした研究
 - 2.2.2.1 語彙に関する研究
 - 2.2.2.2 文法に関する研究
 - 2.2.2.3 談話に関する研究
 - 2.3 発話の質の評価に関する研究
 - 2.4 Academic Speaking の評価指標
 - 2.4.1 TOEFL の概要と評価
 - 2.4.2 IELTS の概要と評価
 - 2.4.3 ACTFL-OPI の概要と評価基準
 - 2.4.4 CEFR
 - 2.4.5 評価指標の対応
 - 2.4.6 評価指標と CAF との関係性
 - 2.5 本章のまとめと残された課題
 - 2.6 本研究の目的と課題

第 3 章 日本語の Academic Speaking の評価基準作成と妥当性の検証【調査 1】

- 3.1 目的
- 3.2 対象者
- 3.3 対象データ
- 3.4 評価基準
- 3.5 評価者
- 3.6 評価方法
- 3.7 分析
 - 3.7.1 複雑さ
 - 3.7.2 正確さ
 - 3.7.3 流暢さ
- 3.8 結果
- 3.9 第 3 章のまとめ

第 4 章 日本語学習者の Academic Speaking の量的分析【調査 2】

- 4.1 目的
- 4.2 対象者
- 4.3 対象データ
- 4.4 分析方法
- 4.5 結果と考察

第 5 章 日本語学習者の Academic Speaking の質的分析【調査 3】

- 5.1 目的
- 5.2 対象者
- 5.3 対象データ
- 5.4 分析方法
- 5.5 結果と考察
 - 5.5.1 「概要」に関する結果と考察
 - 5.5.1.1 論の展開構造と主張と根拠を示す表現形式の使用傾向
 - 5.5.1.2 根拠の数と論証パターン
 - 5.5.2 「論の展開」に関する結果と考察

5.5.2.1 結論と根拠を繋ぐ表現形式

5.5.2.2 根拠の結束性に関わる表現形式

第 6 章 結論

6.1 総合考察

6.2 教育的示唆

6.3 今後の課題

参考文献

参考 Web サイト

付録

第1章 序論

留学生 30 万人計画の実施等により、日本の高等教育機関の留学生は増加の一途をたどっている。そのため、留学生はプレゼンテーションや議論を行うことが求められ、高度なスピーキング能力が求められるようになってきた。この **Academic Speaking** は、様々なアカデミック場面での論証、説明、質疑応答などの能力のことを指し、特に論証はアカデミック場面特有の要素であると言える。高等教育機関での留学生の指導に向けて、留学生の **Academic Speaking** の実態を把握することは重要なことであるが、これらに関する研究は少なく、実態把握はまだなされていないのが現状である。

Academic Speaking に関する研究は、英語を対象とした研究が進められており、**Academic Speaking Corpus** を対象に語彙や定型句、談話構成や表現形式を分析項目とした研究が行われてきている。日本語を対象とする研究も同様の研究が行われてきた。上記のような研究により、講義や口頭発表などの特徴が明らかになってきているが、これらは場面特有の表現形式の実態把握のみが行われているという側面がある。どの場面にも共通して必要となる論証について、特徴を探ることで、**Academic Speaking** の特徴をより詳細に明らかにすることができると考えられる。

さらに、**Academic Speaking** の実態を明らかにするためには、発話を **Good Speaking** であるかどうか評価、検討し、分析を行うことが重要であると考えられる。そのためには **Academic Speaking** の評価指標が必要となるが、日本語の評価指標は管見の限り見当たらない。

そこで本研究では、まず日本語の **Academic Speaking** に関する評価指標を作成、妥当性を検証し、評価指標の言語的側面について、CAF の観点から **Academic Speaking** の特徴を母語話者、学習者（上位群、下位群）ごとに分析する。また、**Academic Speaking** の論理的観点について、質的な調査を行うことで、日本語の **Academic Speaking** の特徴を明らかにすることを目的とする。

第2章 先行研究

英語を対象とした研究では、**Academic Speaking** のコーパス開発が進められており、大規模コーパスが研究に活用されている。それらのコーパスをもとに、語彙や定型句、文法、談話などの分析がなされてきた。その分析の結果、学習者は、語彙の難易度は母語話者ほど高くなく（Mauranen, 2012）、文法のバラエティ、流暢性

においても課題があることが指摘されてきた(石川, 2019)。また, 談話に関しては, **Academic Speaking** は **Academic Writing** と日常会話と共通の要素があり, メタ言語的なコメント, 聞き手への言及など, それぞれに類似した特徴的な傾向を示していた (Csomay, 2006)。さらに, 談話構造の複雑さが異なることも明らかにされてきた (Mauranen, 2009)。日本語に関しては, **Academic Speaking** コーパスは英語ほど大規模ではなく, 数も少ないが, アカデミック場面で用いられる語彙 (菅谷・宮部・遠藤・中村・伊藤・古市・白鳥, 2016), 定型句や文法 (遠藤・菅谷・中村, 2018), 談話 (範, 2010; 深川, 2007) などの研究が進められてきた。文法や談話研究においては, 学習者の単文連続での談話展開や接続表現に関する特徴に関しても明らかにされてきた。このように, アカデミック場面特有の特徴や傾向が明らかにされてきたものの, 場面特有の表現形式が扱われているため, 各場面の基礎となる論証に関して研究を行うことが必要となる。

また, **Academic Speaking** の特徴をより具体的に解明するためには, 発話の質の評価を行い, それぞれの特徴を探ることが重要となってくる。発話の質の評価に関しては, CAF という指標が用いられてきているが, その流暢さ, 正確さ, 複雑さの測定方法に関しては先行研究で一致していない。複雑さに関しては, 「構造的複雑さ」や「語彙的複雑さ」があり, 構造的複雑さには従属関係の比率や節・AS-Unit の長さが用いられてきている。1unit あたりの節数が最も高い因子負荷量を示していたことから (桜木, 2011) 構造的複雑さには 1unit あたりの節数を用いることが妥当である。また, 語彙的複雑さには語彙の多様性として, 語彙の異なり語数と総語数の比率が, 語彙の洗練度には学術的語彙の頻度が, 語彙の密度には機能語あたりの語彙数の比率が用いられてきた (Michel, 2017)。本研究では, 先行研究で多く検証されている語彙の多様性についてさらに検証を行う。正確さに関しては, 誤りのない節や 100 語あたりの誤りの数が指標として用いられてきた。これらについては, どの指標に関しても妥当性が示されてきているため (桜木, 2011), 誤りのない節を指標とする。流暢さに関しては速さ・発話量, ポーズ, 非流暢さの 3 つの因子に分かれている (Sheppard, 2004)。聞き手の理解度には速さ・発話量が最も相関があり, 知覚された流暢さにはポーズが最も強い相関が出ているという結果が出ている (Suzuki & Kormos, 2020) ため, 速さ・発話量とポーズを指標とすることが妥当である。CAF, 評価指標を用いた言語評価の両者ともに発話の質を分析する方法であることから, 近年この 2 つにどのような関係があるのかを明らかにすることで,

発話の質の特徴をより詳細に記述することができる。そのため、TOEFL や IELTS といった言語的記述が詳細に記されている評価指標を対象とした日本語の評価基準の作成及び CAF との関連性の検証が必要となる。

以上を踏まえ、本研究では日本語の **Academic Speaking** の特徴を明らかにすることを目的として、以下 3 点を課題とする。

- (1) 日本語の **Academic Speaking** について TOEFL や IELTS を基にした評価基準を作成し、CAF との関連性について検証する。【調査 1】
- (2) 作成した評価基準をもとに学習者の発話評価を実施し、その分類に基づき、CAF の複雑さ、正確さ、流暢さといった観点から母語話者と学習者 (上位群・下位群) の **Academic Speaking** の特徴を明らかにする。【調査 2】
- (3) 論理的観点から、日本語学習者上位群, 下位群, 日本語母語話者間で相違のあった **Academic Speaking** の特徴について質的に明らかにする。【調査 3】

第 3 章 日本語の **Academic Speaking** の評価基準作成と妥当性の検証【調査 1】

調査 1 では、日本語学習者の日本語運用能力を測定するための日本語の **Academic Speaking** の評価基準について作成、検討を行い、妥当性について検証することを目的とした。そこで、TOEFL, IELTS を参考に評価指標を作成した。評価指標の項目には、言語的側面に関する「話し方」、「語彙・表現」、「文法・構造」という 3 項目と、論証や談話的要素に関する「概要」、「展開」という 2 項目の計 5 項目を設定し、レベルは TOEFL の 4 段階に IELTS の 8, 9 レベルを加えた 6 段階設定した。その妥当性について、科学研究費助成事業「学部・留学生教育研究のためのアカデミック・ジャパニーズスピーキングコーパスの開発」のコーパスから、日本語学習者 40 名、日本語母語話者 23 名の論証データを抽出し、5 つの CAF 指標の値を算出し、得点とこれらの相関分析を行った。その結果、作成した評価基準は母語話者と学習者を明確に区別していたことが分かった。また、CAF による妥当性の分析では、母語話者と学習者、学習者間の違いが流暢さと正確さの指標に見られたものの、複雑さの指標には見られなかった。しかし、評価基準には、CAF では測定できない発話内容の質、論理展開、表現形式の適切さや語彙頻度などに関する記述が含まれていた。CAF と中程度の相関が得られたということは、評価基準が効果的に機能していることを示していると言える。

第 4 章 日本語学習者の Academic Speaking の量的分析【調査 2】

調査 2 では、調査 1 で作成した評価基準をもとに学習者の発話評価を実施し、その分類に基づいて、CAF の複雑さ、正確さ、流暢さといった観点から母語話者と学習者（上位群・下位群）の Academic Speaking の特徴を量的に分析した。調査 1 で対象とした 40 名を評価結果から上位群、中位群、下位群に分類し、上位群と下位群それぞれ 13 名ずつを調査 2 の対象とした。日本語学習者上位群、下位群と日本語母語話者の評価得点について、グループ間に差があることを統計的に確認した上で、各グループの CAF の値を算出し、グループ間で比較し、得点、CAF に関する特徴を分析した。その結果、CAF の各要素は習熟度によって異なる発達が見られていることが明らかになった。「語彙の複雑さ」に関しては、習熟度に変化はなく、語彙の複雑さは有意差が最も検出しやすい学習者下位群と母語話者との間でも見られなかった。また、「発話の複雑さ」に関しては、習熟度の向上に伴い発達するものの、その差は大きなものではなかった。有意差は母語話者と下位群のみに見られたことから、複雑さは習熟度に伴い発達するとは考えられるが、母語話者との大きな差としては現れないと考えられる。さらに、「正確さ」も習熟度の向上に伴い発達するが、母語話者並みになるのには時間がかかると考えられる。母語話者と学習者との間には上位群との間であっても有意差が見られたが、学習者間には有意な差がなかった。上位群には大学院に所属する超級学習者も含まれていることから、正確さを向上させることの難しさが分かる。そして、「流暢さ」は習熟度の向上に伴い、比較的早く向上することが分かった。発話の流暢さ指標もポーズをもとにした非流暢さ指標も母語話者と上位群の間には有意な差が見られなかった。上位群と下位群の差は有意だったことから、習熟度の向上に伴い流暢さは比較的早く向上すると考えられる。

第 5 章 日本語学習者の Academic Speaking の質的分析【調査 3】

調査 3 では、評価基準の中にある「概要」と「話の展開」に関する論の組み立て方や展開に必要な表現形式について、母語話者と学習者との比較を通して、質的分析を行なった。「概要」については、論の示し方、根拠の示し方のパターンについて、結論の位置や根拠の数や内容について分析を行った。さらに、結論を示す表現形式、根拠を示す表現形式について、分析を行った。

分析の結果、論の展開構造と主張と根拠を示す表現形式の使用傾向に関しては、母語話者は両括型の結論の表現形式に関して、「思う」など複数の動詞を、様々なバリエーションを用いて表現していた。根拠の表現形式については、「なぜなら」、「その理由は」、「ので」が多く、接続助詞の使用が71%であった。

学習者上位群は母語話者ほど表現形式にバリエーションはなく、根拠を示す表現形式については、「例えば」や「確かに」など、例示、譲歩などの方法を用いていた。「ので」、「だから」など根拠を示す表現形式を明示的に用いていた。

学習者下位群に関しては、結論を示す表現形式は他の対象群よりもさらにバリエーションが少なく、同じ表現形式「～と思う」を多用したり、論の終わりの結論では表現形式を使用しない傾向にあった。さらに、結論を述べる前には「だから」など接続詞を用いた他、「それで」、「そして」など順接を示す表現形式や、「が」、「でも」、「けど」など逆接表現が28%と3割程度を占めていた。このように、構成をはっきりと示すことがなされていないことが特徴として挙げられる。根拠の数と論証パターンの結果については、学習者下位群は根拠を3つ用いている場合もあり、それらを合流論証(43%)で論を述べていた。

「論の展開」に関しては、母語話者は結論と関連のある語彙や指示詞、定義を用いて結束性を高めていることが明らかになった。学習者は上位群、下位群ともに、語彙や指示詞の結束性は示されなかった。また、根拠から結論を示す表現形式については、学習者上位群は指示詞を用いて結束性を示そうとしていたものの、論証に関する表現ではなかった。学習者下位群は、「だから」という接続詞を用いており、その他にも順接や逆接を示す接続詞を援用していた。

また、根拠内の関係性を示す表現形式については、母語話者は根拠として取り上げている出来事や事柄に関して、詳細に叙述、説明することができていた。複文における文と文の関係性が適切に示されているため、よりよい論証となっていた。一方で、学習者上位群は、複文の文と文の関係性を示す表現形式がなかったりするために、やや関係性が不明瞭なものとなっていた。学習者下位群に関しては、特定の順接や逆接の接続詞を多用する傾向にあることが明らかになった。

第6章 結論

調査1の結果、本研究で作成した Academic Speaking の評価指標と CAF との関係については、語彙的複雑さ以外のすべての指標と有意な相関にあり、おおむね中

程度の相関を示した。CAF と中程度の相関が得られたということは、評価基準が効果的に機能していることを示していた。

また、調査 2 の量的分析により、CAF の各要素は習熟度によって異なる発達がなされていることが明らかになった。「語彙の複雑さ」に関しては、母語話者、学習者上位群、下位群それぞれに有意差はなく、「発話の複雑さ」に関しては、複雑さは習熟度に伴い発達するとは考えられるが、母語話者との大きな差としては現れなかった。この点は、Zare, Bagheri, Sadighi, & Rassaei (2021) の結果とは異なっている。語彙的複雑さが発話の複雑さより理解に大きく影響するという点について、相違が出る結果となった。「正確さ」については、母語話者と学習者との間には上位群との間であっても有意差が見られたが、学習者間には有意な差がないため、上級においても母語話者並みになるのには時間がかかると考えられる。そして、「流暢さ」は習熟度の向上に伴い、比較的早く向上することが分かった。この流暢さに関する結果は、Miyamoto (2019) の結果とは一致しない結果となった。

そして、質的分析の結果、論の展開構造と主張と根拠を示す表現形式の使用傾向に関しては、学習者上位群は、表現を一部正確に使えているものの、原因と結果を示す表現形式を援用したりするなど、「結論」、「根拠」など論証に必要な構造を示す表現はまだ身に付いていないと言える。さらに、学習者下位群については、表現形式のバリエーションが少なく、1文と1文を繋ぐ順接、逆接を示す表現形式を多用していることが分かった。根拠の数、論証のパターンについては、学習者下位群は合流論証が多かった。これは、言語的能力から、単純論証として述べるより、異なる根拠を複数提示する合流論証を選択した方が論証を成立させることができるため、合流論証を選択したためではないかと考えられる。

さらに、「論の展開」に関する結果については、(1) 論証の構造である結論と根拠を繋ぐ表現形式、(2) 根拠内の関係性を示す表現形式について分析を行なった。その結果、(1) に関しては、母語話者は結論と関連のある語彙、指示詞や定義を用いて結束性を高めていることが明らかになった。一方で、学習者は上位群、下位群ともに、そのような結束性は示されなかった。また、根拠から結論を示す表現形式では、学習者上位群は指示詞を用いて結束性を示そうとしていた例も見られたが、論証の根拠と結論という関係性を示すものではなかったと言える。この結果は、荻原・齊藤・増田・米田・伊藤 (2001) が述べているような、上超級学習者は接続詞を母語話者同様に使いこなすということとは一致しない。対象レベルにもよるが、

今回の対象である論証は、関係性を示す表現形式を明示することが重要となり、難易度も高いからであると考えられる。また、学習者下位群は、順接や逆接を示す接続詞を用いて関係性を示していたこともあり、論証の根拠と結論という関係性を示すものではなかった。

また、(2) 根拠内の関係性を示す表現形式については、母語話者は根拠として取り上げている出来事や事柄に関して、詳細に叙述、説明することができていた。学習者上位群は、複文の文と文の関係性を示す表現形式を用いないために、学習者下位群に関しては、特定の順接や逆接の接続詞を多用するために、結束性が失われていた。関係性をはっきりと示す接続表現の学習、指導と普段から説明をする能力を育てることがより上級レベルの発話へと繋がるのではないかと考える。

本研究は、これまで研究が進んでいなかった日本語の **Academic Speaking** の評価基準の作成の基盤研究として位置づけることができる。また、質的分析からは、学習者上位群は、論証構造と構造を明示的に示す表現形式の正確さ向上、また根拠内での関係性をはっきりと示す接続表現の学習が必要であると言える。学習者下位群については、1文と1文の関係性を示す順接、逆接関係だけではなく、談話の複雑さに合わせた叙述の練習等が必要となるのではないかと考える。

今後の課題として、対象者のデータを増やし、母語とレベルの間に交互作用が生じないかどうかを検証すること、CAFの指標について更なる検証をすることが必要となる。さらに、今後、日本語母語話者の **Academic Speaking** の特徴に関しても詳細な分析を行うことにより、大学で学ぶ日本語母語話者などへの **Academic Speaking** 指導に寄与することができると考える。

参考文献

- Csomas, E. (2006). Academic talk in American university classrooms: crossing the boundaries of oral - literate discourse? *Journal of English for Academic Purposes*, 5(2), 117-135.
- Mauranen, A. (2009). Spoken rhetoric. In E. Suomela-Salmi, & F. Dervin (Eds.) *Cross-Linguistic and cross-cultural perspectives on academic discourse* (pp. 193-199). Amsterdam: John Benjamins.
- Mauranen, A. (2012). *Exploring ELF: academic English shaped by non-native speakers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Michel, M. (2017). Complexity, accuracy and fluency (CAF). In S. Loewen. & M. Sato (Eds.), *The Routledge handbook of instructed second language acquisition* (pp. 50-68). London: Routledge.

- Miyamoto, M. (2019). *Capturing L2 oral proficiency with CAF measures as predictors of the ACTFL OPI rating*. Unpublished doctoral dissertation, Purdue University.
- Sheppard, C. (2004). The measurement of second language production: The validity of fluency, accuracy, and complexity. *語学研究*, 19, 139-156.
- Suzuki, S., & Kormos, J. (2020). Linguistic dimensions of comprehensibility and perceived fluency: An investigation of complexity, accuracy, and fluency in second language argumentative speech. *Studies in Second Language Acquisition*, 42(1), 143-167.
- Zare, M., Bagheri, M. S., Sadighi, F., & Rassaei, E. (2021). An investigation of the linguistic complexity of IELTS writing topics based on the levels of discourse representation and the degree of meaning coding. *Cogent Education*, 8(1), 1-20.
- 石川慎一郎 (2019) 「英語学習者コーパス研究の現状と課題 電子情報通信学会 基礎・境界ソサイエティ」『Fundamentals Review』 12(4), 280-289.
- 遠藤直子・菅谷有子・中村亜美 (2018) 「理工系学習者への~テイクの用法提示について—『理工学系話し言葉コーパス』と日本語教材の調査から—」『日本語教育』 171, 17-30.
- 荻原佳子・齋藤真理子・増田真左子・米田由喜代・伊藤とく美 (2001) 「上・超級日本語学習者における発話分析 発話内容領域との関わりから」『世界の日本語教育.日本語教育論集』 11,83-102.
- 桜木ともみ (2011) 「『複雑さ・正確さ・流暢さ』指標の構成概念妥当性の検証: 日本語学習者の発話分析の場合」『JALT Journal』 33(2), 157-173.
- 菅谷有子・宮部真由美・遠藤直子・中村亜美・伊藤夏実・古市由美子・白鳥智美 (2016) 「『理工学系話し言葉コーパス』における複合辞の特徴 中級日本語教材をアカデミックなコミュニケーション能力を高めるために」『言語と文化』 28, 1-25.
- 範海翔 (2010) 「日本語母語話者と中国人日本語学習者の意見文における接続表現に関する比較研究」『言語の普遍性と個性』 1, 87-105.
- 深川美帆 (2007) 「接続表現から見た上級日本語学習者の談話の特徴-日本語母語話者と比較して-」『言葉と文化』 8, 253-268.